



Republic of  
Ghana  
01

# 笑顔でつながる…

～ナーンデモ スター(ありがとう)! ガーナ～

田中 紀子  
山口市立大蔵小学校

●実践教科等/音楽科・総合的な学習の時間 ●対象学年/小学4年生  
●時間数/6時間 ●対象人数/103名

ココが  
素晴らしい!

歌や音でイメージを膨らませていく導入が素晴らしい。ガーナで出会った笑顔に注目して展開していく視点もよかった。

## ❖カリキュラム

【実践の目的】 ガーナの子どもたちの生活の1場面をとおして、精一杯生きているガーナの子どもたちの笑顔を伝え、自分たちの生活の中で、身近な人とも異国の人も笑顔でつながる時間を大切にさせたい。

## ❖授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ガーナのわらべうた「チェッチェッコリ」と楽器(ジャンベ)	・アフリカの音楽(歌・踊り・楽器演奏)に親しむ ・「チェッチェッコリ」(ガーナのわらべうた)を演奏する	・音楽CD、ビデオ ・現地収録の映像 ・楽器(ジャンベ) ・歌詞カード
2	ガーナの子どもたち～出会い編～	・ガーナの子どもたちの1日の生活を知り、自分たちの生活と比較する ・収録した音を聞いて、研修参加者がガーナの子どもたちと出会った時のおどろきとうれしさを想像する	・生活実態調査の結果 ・写真 ・現地収録の音 ・ワークシート(P15/資料1) ・パワーポイント
3	ガーナの子どもたち～家庭生活編～(人権参観日 参観授業)	・ガーナの子どもたちの家庭での生活の様子を採取した音から想像する ・青年海外協力隊員としてガーナで日本語を教えている庄田隊員のエピソードから、町での助け合いの中からうまれる感謝の笑顔を感じ取る	・写真 ・現地収録の音 ・具体物(炭・水・器) ・ワークシート ・パワーポイント
4	ガーナの子どもたち～学校生活編～	・ガーナの子どもたちの学校での生活の様子を採取した音から想像する ・自分たちの運動会や持久走大会の時と比べ、仲間(友だち)を応援する時の歓声や笑顔は、日本でもガーナでも同じであることを知る ・自分が学校生活で笑顔になれる時はいつかを発表する	・写真 ・現地収録の音 ・米袋 ・ワークシート(P16/資料2) ・パワーポイント
5	学校に□□□□子どもたち	・児童会主催の募金活動で啓発のために視聴したユニセフの活動概要のビデオの内容を思い出す ・前時で扱った写真から学校の校地内に私服で来ている子ども、授業がある時間帯に村を歩いている子どもの写真を改めて見て、この子どもたちの生活を想像する ・ワークシート、□□□□(答え:行けない、行きたい)に入る言葉を考える ・自分ができる国際貢献を考える ・募金することだけが今の自分たちでできることなのか、意見交換する	・ユニセフのビデオ ・写真 ・ワークシート ・パワーポイント
6	笑顔でつながる…	・ガーナの子どもたちの様々な笑顔の写真を思い出し、彼らがどうして笑顔になれるのか考える ・3,4時限目で自分自身が笑顔になる時を発表した内容と比べて、笑顔の理由の違いはないか考え、自分の中でも笑顔になる理由が変わった児童もいるので、新しく付箋紙に書きかえて発表する ・「スマイル=笑顔はもらっているのかな あげているのかな」と、投げかけてみる ・前述の庄田隊員へのインタビューを聞いて、大人になってから外国で生活することでわかることがあることを知る	・写真 ・庄田隊員へのインタビュービデオ ・ワークシート ・パワーポイント

※1時限目で扱った「チェッチェッコリ」は、毎回授業の導入5～10分の時間枠で、グループ練習(ジャンベと小物打楽器による伴奏にのせて歌う表現活動)をする。そのため本時の学習活動は30～40分である。

## ◆授業の詳細

### 1 時限目 ガーナのわらべうた「チェッチェコリ」と楽器(ジャンベ)

ビートルズの楽曲である「オブラディオブラダ」は、アフリカセネガル出身の歌手ユッスー・ンドゥールも西アフリカの太鼓ジャンベをフィーチャリングして歌っている。この編曲で4年生は、校内音楽会でも演奏発表したの、音楽会終了後全員でジャンベの演奏を体験することにした。子どもたちは、ジャンベの皮の中央と縁とでは、音高がちがうことに気づき、低音と高音をうまく組み合わせて、リズムカルに演奏していた。そして、ジャンベに使われている材料からアフリカの自然や人々の生活に思いをさせ、授業全体の導入とした。

ガーナのわらべうた「チェッチェコリ」は、日本でもキャンプファイヤーなどのレクリエーション活動で歌われたり、2003年7月にはテレビCMソングとしてCD化されている。実際にGhana-Japanese Language-Foundationでの交流会で子どもたちが発表してくれたので、その収録ビデオから歌と踊りをマスターすることにした。そして、来学期の音楽科の授業で演奏発表することを目標に、毎時間5～10分程度各班で練習を続けている。



ジャンベを演奏する子どもたち

### 2 時限目 ガーナの子どもたち～出会い編～

視察先の学校にて、私たちのバスが到着すると、すぐさま駆け寄ってきた子どもたちの様子を車窓から収録した音を、子どもたちに聞かせる。その聞こえてきた音を言葉や絵で書かせて発表しあった後、その光景を想像させた。

聞こえてきた音の中には、歓声や車のエンジン音に混じって、「白い人」「チャイナ」「ひかれるなよ」などがあつた。子どもたちも我々も異国の人々との出会いにとまどいながらも素直に喜んでいる様子が、音を聴くことだけからも如実にとらえられたことは興味深い。

また、本校の児童とGhana-Japanese Language-Foundationで日本語を学習しているガーナの子どもたちを対象に行った生活実態調査、そして現地で撮影した写真をもとに、両国の子どもの1日の生活について比較し考察させた。(P15/資料1) この活動により、同年齢でも1日の時間の使い方、過ごし方に違いがあることに気づき、ガーナという国について興味をそそられたようである。



出迎えてくれた子どもたち

#### 児童の反応より

##### ガーナのお友だちの生活とくらべて、思ったこと

ごはんを手で食べるのは、すごくびっくりしました。持ち物を頭にのせて運ぶのは難しそうでした。

ガーナではやかんの水でからだをあらいお風呂に入れないのはかわいそうです。

ガーナの人はずごくえらいなあと思いました。理由はガマンしているから。

### 3 時限目 ガーナの子どもたち～家庭生活編～(人権参観日 参観授業)

ホームビジット先で連れて行っていただいた市場にて録音した街の雑踏から、人々の生活を探る。街角でコッシーと呼ばれる揚げ芋菓子を作りながら売って生計をたてている家族の様子、モスクから流れてくるコーランの響きなどから、文化的宗教的な見地から人々の生活の基盤を想像することができた。

また、青年海外協力隊として現地の子どものために日本語や日本の伝統文化を教えている庄田隊員から聞いたエピソードをストーリー仕立てにして紹介する。具体的には、学級担任の先生とロールプレイの手法で行った。炭を拾った庄田さん、遠くからその様子を見守り水を運んでくれた女性の役をそれぞれ演じ、子どもたちに臨場感を味あわせるようつとめた。その中で、炭を拾ってくれた人々と、貴重な水を分けてくれた女性のやさしさをとらえ、国を超えて息づく「思いやり」と「感謝」の心、そして助け合って生きていく人々の笑顔の美しさをとらえさせた。(P16/資料2)



コッシーを揚げている女性

田中 紀子  
報告書①

古賀 匠子  
報告書②

村木 啓司  
報告書③

重森 美由紀  
報告書④

黒明 堅一郎  
報告書⑤

山崎 知代子  
報告書⑥

祝迫 直子  
報告書⑦

河毛 樹  
報告書⑧

森 奏三  
報告書⑨

安部 一実  
報告書⑩

参考資料

## 児童の反応より

### 炭を拾った庄田さんが感激したこと

- ・ひろって手が黒くなったので、炭をおとした人が手をあらわせてくれたこと
- ・みんなで手伝ったこと ・水を持ってきてくれたこと
- ・水がすくないのに、手をあらわせてくれたこと
- ・お礼を言ってもらえたこと
- ・ありがとうの心が伝わったこと

### 参観授業の事後アンケート

#### 保護者の感想より

子どもたちが広く世界に目を向け、自分たちとの生活の違いや、自分たちにも通じることを考える機会になったと思います。

今回は他国の文化の違いや外国人との関わり方を考える授業で自分自身の勉強にもなりました。子どもにとって身近な先生ご自身の体験を聞かせていただけて印象深い授業だったと思います。また、他国の方が困っている時に、手を貸してあげる勇気につながっていくと思いました。

※この授業は、保護者対象の参観授業として実施した。

## 4時限目 ガーナの子どもたち ～学校生活編～

訪問先のダヒンシェリ中学校での1コマを、採取した音から想像させた。1つは、始業時に当番の生徒が鳴らすカウベルの音、もう1つは、休憩時間、生徒たちが行っていた袋飛びレースの様相である。カウベルについては、本校にも類似の楽器があり、実際に同じように音を出して体感させてみた。音楽科の授業の発展的内容として、自分たちで合図になるリズムを創作してみることを来学期、実践してみたいと考えている。

袋飛びレースの様相からは、その写真から読み取れるガーナの実情を、フォトランゲージの手法をとり、子どもたちにとらえさせた。ポイントとしては、以下の内容を考えた。

- ・遊びの内容～屋外で身体を使って行う遊びがメインである。
- ・袋の種類～何(カカオ豆)が入っていた袋かで、ガーナの主要産業を知ることになる。
- ・私服の子どもの存在～学校に行っていない子どもがいる。

自分たちの学校生活とはかなり違いのある現状にちょっと衝撃をうけていたようであったが、袋飛びレースを応援している歓声は、自分たちが運動会や持久走大会の時、同じように友だちを応援する時の声と似ていることにも、気がついていったようである。写真の表情からも、友だちや仲間を応援する時の笑顔も万国共通ではないかと、投げかけてみた。最後に自分たちが笑顔になる時はどういう時か、付箋紙に書いて発表させた。



袋飛びレースに興じる子どもたち

## 児童の反応より

### 自分が笑顔になれる時

- ・ゲームを買った時 ・おこづかいをもらった時
- ・自分のほしい物をもらった時 ・好きな給食が出た時
- ・好きなテレビがある時 ・試合で勝った時
- ・くじが当たった時 ・テストでいい点(100点)がとれた時
- ・友だちと仲直りした時 ・何かが完成した時
- ・ゆめがかなった時 ・お母さんにほめられた時
- ・遠くに引っこした友だちに会える時
- ・友だちに「ありがとう」と言われた時

## 5時限目 学校に□□□□子どもたち

児童会主催の募金活動で、啓発のために視聴したユニセフの活動概要のビデオでは、たばこ作りの労働に従事する子どもたち、内戦に巻き込まれ戦地にかり出される子どもたち、毎日家族のために水くみに出かける子どもたちの様子が紹介されていた。そのような現実で生きる子どもたち同様、実際にガーナで出会った子どもたちの過酷な現状について、考える時間とした。

具体的には、前時で扱った袋飛びレースの写真に写っていた学校の校地内に私服で来ている子ども、授業がある時間帯に村をはだして歩いている子ども、同じく日中、泥水に足をつけるだけで発症すると言われていたギニアワーム症に感染し治療を受ける子どもの写真を提示し、この子どもたちの1日の生活を想像させた。

共通項として、学校に行っていない子どもがいるというガーナの現実が浮かび上がってくる。そこで、ワークシートのサブタイトル「学校に□□□□子どもたち」の空欄4マスにあてはまる言葉を考えさせた。このサブタイトルが本授業のキーセンテンスとなる「□□□□」には、当初「行けない」の言葉しか考えていなかったが、1名ほど「行きたい」と記入している児童がいた。たしかに、写っている子どもに感情移入してとらえると「行きたい」になる。他人事ではなく、身近な問題として感じてくれていたようで嬉しかった。それでは、なぜ、学校に行けないのか、学校に行かずに何をしているのか、学校に行かないと困ることは何か、ブレインストーミングの手法を用いて、意見交換させた。



ギニアワームの治療を受ける少年

### 児童の反応より

#### 学校に行かないと困ること

- ・字が読めない、書けない ・上手に話せない
- ・相手の言っていることがわからない ・本が読めない
- ・数が数えられない ・計算ができない ・将来働けない
- ・楽しんだりすることができない ・友だちができない
- ・運動することがないので病気になる
- ・算数ができないと料理ができない
- ・おとなになって子どもに教えられる

最後に、自分たちにできる国際貢献として、学校に行きたい(行けない)子どもたちのためにできることは何かを発表する。ちょうど、ユニセフの募金の時期だったので、募金するという声が大半を占めていたが、募金することだけが今の自分たちにできることなのか考えさせた。

## 6 時 限 目 笑顔でつながる…

ガーナの子どもたちの様々な笑顔の写真を思い出し、自分が一番気に入った笑顔の写真を選び、その理由を発表させた。一番多かったのは、出迎える笑顔の写真である。

前時の段階では、自分たちは何か物を買ってもらった時とかお小遣いもらった時など、物質的に満たされた時に笑顔になるという意見が多かった。しかし、ガーナの子どもたちが過酷な現実の中でも明るく助け合っている様子がうかがえる笑顔を目の当たりにしたことで、本当に笑顔になれる時は、物質的に満たされた時ではないのではないか、そして実は自分の欲しい物が手に入ったことではなく、その時に一緒に喜んでくれる家族や仲間がいることではないかと、投げかけてみた。そこで、もう一度自分が笑顔になれる時はいつかを考えさせた。前時に書いたことと意見が変わった児童はもう一度付箋紙に書き、発表させた。すると、多少はプレゼントをもらった時という物質的に満たされたことで笑顔になるという答えもあったが、圧倒的に友だちや家族と過ごす時という答えが増えていた。また、練習したことが報われた時など達成感をあげる児童もいた。

最後に庄田隊員と我々研修参加者が、車中で会話した模様を収録したビデオを紹介する。これは、改まったインタビュー形式ではなく、ガーナでの生活について語っていただく中から、日本にずっといたら気づかなかっ

たこと、海外に出て初めてわかったことなどにも、さりげなくふれられている内容である。実体験にもとづく話なので、インパクトがある。テーマがあったわけではないが、話の中に子どもたちへ向けて「なぜ、学校で勉強するのは、いずれ必ずわかる時がある。」というものがあつた。そこを取り上げ、国際貢献の在り方を考える前に、今の自分に課せられたことを責任をもってやりとげることこそ、国際貢献への第一歩ではないかと話をした。「スマイル=笑顔はもらっているのかな あげているのかな」

これは、子どもたちもよく行くファーストフード店のキャッチコピーである。自分自身を振り返り、笑顔でつなぐ人との“絆”について、ワークシートに自分の思いを書き、学習全体のまとめとした。

### 児童の反応より

#### ガーナのことを勉強して、自分の中でわかったこと、かわったこと

- ・ガーナのことをもっと知りたいです
- ・ガーナに行ってみたくです
- ・地球環境を大切にしたい
- ・勉強はすごく大切だとわかりました
- ・計算ドリルをがんばろうと思いました
- ・ガーナには水が少ないからぼくたちも節約しなきゃならないと思いました
- ・わたしたちは、物が早く手に入るけど、ちがう国の人は手にあまり入らないのに“がんばって楽しく”生活しているんだなと思いました
- ・顔の色とか言葉はちがうけど、うれしかった時とかは、いっしょじゃないかなと思いました
- ・言葉の通じない国の人とでも、笑顔があれば相手の気持ちができるんだなと思いました
- ・国と国がつながるには、言葉より、笑顔の方が大切だと思います



笑顔になるとき

友だち



スマイルはもらっているのかな あげているのかな